

インフォメーションディスプレイ Vol.26



株式会社ジェイアール東日本企画
交通媒体局 媒体開発部
部長

山本 孝 様

株式会社ジェイアール東日本企画 様

JR東日本グループの総合広告代理店であるJR東日本企画様は、駅・車両・店舗などJR東日本のファシリティを活用する次世代型コミュニケーションの開発に取り組んでいます。広告映像配信ネットワーク“ステーションチャンネル”もその一つ。駅を核にした新たな広告モデルを追求する試みです。



所在地：東京都渋谷区恵比寿

コミュニケーションサービス新時代へ。 駅ならではの情報メディアが誕生しました。

新宿駅
PN-655×13台導入
渋谷駅
PN-655×2台導入
PN-455×5台導入

デジタルサイネージは、デジタル技術とネットワークを用いて広告や情報を配信するコミュニケーションシステムで、商業施設や公共スペースで活用されます。このほどJR新宿駅・渋谷駅構内に登場した“ステーションチャンネル”もデジタルサイネージの考え方に則ったもの。駅という場所の特性を活かす映像配信システムです。

「昨年末より商品化を踏まえて映像配信実験を実施し、この7月に正式に広告媒体として営業を始めました。現在は広告主からご提供いただく映像素材を6~10分ほどのロールに編成し放映しています。大画面モニターによる視認性、訴求性の高さが最大の特長です。」

ターミナル駅で連続、反復して広告訴求ができ、電車内の映像メディア“トレインチャンネル”との連動も可能。システムは、エリアごとに別のコンテンツを配信したり、時間帯別あるいは日替わりでプログラムを変更することも想定して設計されました。“ステーションチャンネル”はまさに交通広告のニューモデルだと言えるでしょう。



JR新宿駅東口改札前にて。通路に面して設置された「PN-655」が高精細大画面の実力を発揮。少し見上げても、あるいは少し離れた場所からでも鮮やかな映像が楽しめる。

導入時の評価ポイント

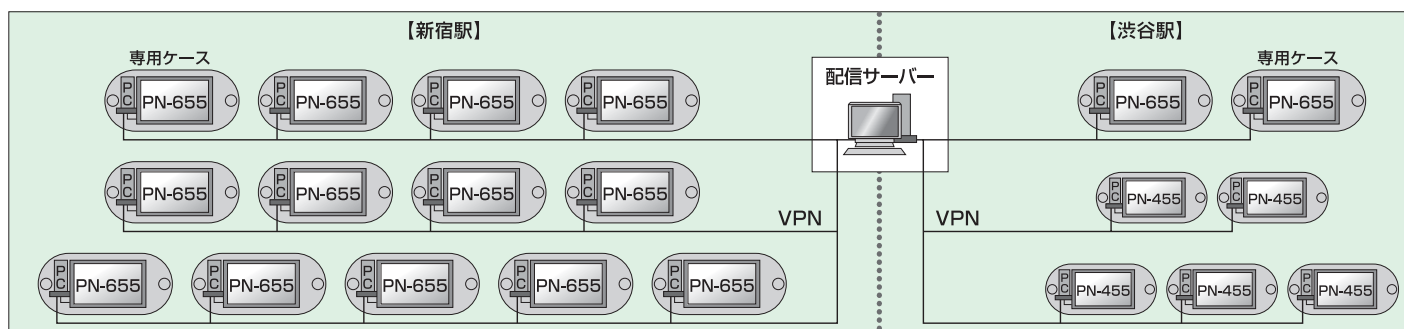
■ 広いスペースで生きる
■ 迫力の大画面液晶

■ 高精細な映像表現が可能な
■ フルスペックハイビジョン

■ どんな角度からも見やすい
■ ASV低反射ブラックTFT液晶

■ オリジナルケースでカスタマイズしやすい
■ オープンフレーム構造

■ システム概略図



導入の経緯

人と情報が行き交う場所で
目を引きつけるために

足掛け2年に及んだ開発プロジェクト。モニターをはじめとするデバイスは、その初期段階でスペック、投資効率、運用のしやすさなどから多角的に検討され、絞り込まれました。

「駅に設置するモニターに求めたのはまず大きさ。さらに、ハイビジョンコンテンツへの対応。長時間使用や環境変化に耐えうる安定性。それらの条件を満たしていたのがインフォメーションディスプレイでした。設置

環境に合わせ、天井の高い場所には65インチを、スペースが限られている場所には45インチを選択しました。ちょうどデジタルサイネージに対する世の中の感度が高まってきたところで、タイミングよく試行に踏み切りました。」実験段階の意識調査では、認知率、許容度ともに高評価。好機を逃さず試運転を重ね、満を持して導入されたのが“ステーションチャンネル”なのです。

導入後の感想

ときにはインフォメーションに早変わり
広告と情報提供の両立が実現

悪天候などの緊急時、“ステーションチャンネル”は広告媒体とは別の顔を見せます。通常コンテンツの下に自動的に電車の運行情報のテロップが流れるのです。

「お客様サービスという視点で見れば、リアルタイムの運行情報は重要なコンテンツ。広告を妨げることなく情報を流す構想は企画段階からありました。あくまでもメインは広告ですが、異常時のインフォメーションとの両立ができれば駅の利用者にとってもメリットだと考えています。」

言わば、広告とインフォメーションのハイブリッドメディア。この試みは駅というスペースに自然に溶け込み、JRサイドからも高く評価されています。

外観デザインも好評です。オリジナルケースはSTB・フィルター・ファンなどを組み込むために設計されたものですが、斬新なデザインが予想以上に目を引きます。

「モニターをモニターのまま設置したのでは見過ごされることもあるでしょう。そこで、目に新しく意外性のあるデザインを採用



しました。見た目のインパクトも商品価値を高める要素ですから。」



丸みのあるデザインが新鮮なオリジナルケース。良い意味でモニターっぽくないと評判。異常時にはコンテンツが若干縮小され、下部に運行情報が流れる。

今後の展開予定

生活ネットワークのHUBである駅を
コミュニケーション拠点に

駅の快適性を高める情報ツールであり、広告モデルとしても成立する。交通広告の世界に一石を投じた“ステーションチャンネル”は、コミュニケーションの好循環を創ろうとしています。

「コミュニケーションのデジタル化、ネット

ワーク化は避けられないこと。将来にわたって広がりが望めるシステムを開発したことは、先行投資としても間違っていなかったと確信しています。今後は、拠点を拡げながら、広告メニューの充実を図っていきたい。エリアの特性を活かす、メディアミックスを活かす

など、より絞り込んだ展開が期待できると思います。」

駅は単なる生活圏ではなく、人と社会を結ぶメディアです。その可能性を広げるコミュニケーションサービスが、いよいよ本格的に動き出します。

●お問い合わせは

シャープ株式会社

情報通信事業本部 ビジネスソリューション事業部
電話：(03)3260-8217 / (0743)55-6373

2007年10月発行